

第6回 日本アレルギー学会関東地方会



New Ideas, New Allergology

会期 2021年11月27日(土) 会場 秋葉原コンベンションホール

会長 中尾篤人(山梨大学医学部免疫学講座)

プログラム・抄録集



Conjunctivitis



Food Allergy



Rhinitis



Asthma



Atopic dermatitis



第6回日本アレルギー学会関東地方会の開催にあたって



第6回日本アレルギー学会関東地方会
会長 中尾 篤人
山梨大学医学部免疫学講座

第6回日本アレルギー学会関東地方会の学会長を拝命いたしました山梨大学医学部免疫学講座の中尾です。どうぞよろしくお願い致します。

さて、日本アレルギー学会の地方会において基礎医学の分野から会長が選ばれることはあまりないこと（もしかして初めて）です。これは現在の日本アレルギー学会関東支部長（本年度の日本アレルギー学会学術大会長）である埼玉医大呼吸器内科教授永田真先生のご英断によるものです。永田先生は、かねてからアレルギーの基礎研究および複数の臨床科（内科、小児科、耳鼻科、皮膚科、眼科）に精通したトータル・アラジスト（total allergist）の育成に注力されていますが、そのお考えに基づいてこのような機会を与えていただきました。この場を借りて心より感謝いたします。

このような背景のもと、せっかくのチャンスですので、本地方会のテーマを「New Ideas, New Allergology」と設定し、会長企画を「未来のアレルギー創業に向けて」としました。その意図は、参加者の方々に、改めてリサーチマインドを想起して欲しいと思うからです。研究は、新しい仮説（アイデア）を立てそれを検証する活動であり、そのアイデアがユニークで本質的であるほど評価を受けます。他の人が思いつかない新しいアイデアを考えつくことが研究のカギであり醍醐味であり大きな楽しみ（fun）です。本地方会では、テーマや会長企画を通じてこのリサーチマインドを改めて強調できればと思います。私自身もそういう視点で、今回の症例報告を含む多くの一般演題を見てみると本当に新しいアイデアの宝庫でありとても面白いと感じました。同様に、参加者の皆さんが各演題から何かインスピレーションを得て、今後の臨床や研究に生かしていただく機会を、本地方会が提供する場となることを願っています。

新型コロナウイルスのパンデミックにより、社会的経済的にも困難な状況の中、40題を超える演題、3つの教育講演、4つの教育セミナーを企画することが出来ました。この場を借りて、演者や座長の先生方、後援企業の方々、永田先生や役員の先生方および私にとってあまり慣れていない作業のため色々とお迷惑をおかけした事務局の方々に改めて深く感謝いたします。

I wish you have fun in this meeting!

A会場 (ホール A)

開会式 9:55~10:00

会長 中尾 篤人 (山梨大学医学部免疫学講座)

会長企画「未来のアレルギー創薬に向けて」10:00~11:30

座長 中尾 篤人 (山梨大学医学部免疫学講座)



スーパーコンピューターと最新の構造解析技術を用いた創薬

モジュラス株式会社 寺田 央

近年、新たな薬剤の開発は華々しい展開を見せており、従来の低分子医薬品だけでなく、抗体・核酸・細胞・遺伝子改変などの最先端の技術により、治療モダリティーや対象となる疾患も広がりを見せている。その一方で、十分な治療法がない疾患は数多く残っており、今後も引き続き新たな治療法が開発が期待される。しかしながら、世界的にも医療費の増大が社会的に大きな問題となっており、一般的に長期化する医薬品の開発期間やそれに伴う莫大な費用の低減がこれまで以上に期待されている。低分子医薬品は経口投与可能で利便性が高いだけでなく、一般的には製造コストに優れるため、医療費削減の観点からもその新たな可能性を模索することに改めて価値が見出されつつあるが、依然として開発期間やコストについては課題があった。

筆者の属するモジュラス株式会社では、スーパーコンピューターを利用した化合物と創薬標的タンパクの動的構造シミュレーションを超高速かつ大量に実施することにより、実際に合成・評価することなく、活性を高い精度で予測することに成功しており、新たな構造解析手法や世界中の研究機関と幅広く協働する「グローバル・ネットワーク型研究実行モデル」を組み合わせることで、低分子創薬の大幅な効率化のみならず、数多くの新たな作用機序の化合物の創製に成功している。当日は、最先端の低分子創薬の実際について事例を交えつつ議論したい。

.....
寺田 央 (てらだ よう)

東京大学大学院・農学生命化学専攻・修士課程、東京医科歯科大学大学院・バイオ情報学専攻・博士課程修了(理学博士)。1999年、山之内製薬(後にアステラス製薬)に入社。幅広い疾患領域・標的分野について多数の新規創薬研究プログラム立案と推進を担い、複数の化合物を臨床入りさせた。2014年、設立に貢献した米国ボストン地区の創薬ベンチャー Mitobridge 社に派遣、研究プログラム立案推進に加え、リエゾンとして従事。2016年、外部イノベーション取り込みを担う同社ボストン事務所メンバー、後にディレクターとして、欧米のアカデミア・ベンチャーとの新規提携を推進する傍ら、2017年の\$450Mでの Mitobridge 社買収に貢献。2018年にモジュラス株式会社 CSO・Chief Biologist に就任、2020年より同社研究開発担当執行役員。

モジュラス株式会社 HP: <https://modulusdiscovery.com/>



アレルギー免疫療法の臨床試験から見てきた「スギ花粉症の新知見」

鳥居薬品株式会社 土井雅津代

日本の国民病とされるスギ花粉症への治療は、未だ薬物療法が主流であり、アレルギー症状に対する対症療法でしかない。一方、アレルゲン免疫療法は、アレルギー疾患の自然経過を変え得る、症状の治癒あるいは長期寛解が期待される唯一の治療法とされている。本邦では、舌下免疫療法 (Sublingual Immunotherapy, SLIT) として、2015年にダニ舌下錠 (ミティキュア®)、2018年にスギ花粉舌下錠 (シダキュア®) が承認された (1, 2)。また、世界に先駆け、2019年に dual SLIT の安全性を示したことで、舌下錠の併用が支持される環境となった (3)。現在、12歳未満において SLIT が可能なのは本邦だけである。本シンポジウムでは、SLIT 錠の小児患者における服薬アクセプタビリティについて、凍結乾燥錠の製剤特性から概説する (4)。加えて、スギ花粉症に対する SLIT 錠3年間の有効性 (long-term efficacy)、その後、休業した2年間における疾患修飾効果 (disease's modifying effect) に関する検討について報告する (5)。最後に、ヒノキ花粉による鼻炎症状に対するスギ花粉 SLIT 錠の有効性について、スギ花粉とヒノキ花粉の抗原交差性の観点から今後の展望を示したい。

参考文献

- 1) Biol Pharm Bull. 2020 ; 43 (1) : 41-48.
- 2) J Allergy Clin Immunol Pract. 2019 Apr ; 7 (4) : 1287-1297.e8.
- 3) Allergol Int. 2020 Jan ; 69 (1) : 104-110.
- 4) Int Arch Allergy Immunol. 2017 ; 174 (1) : 26-34.
- 5) J Allergy Clin Immunol Pract. 2021 Jul 29 ; S2213-2198 (21) 00825-4

■自己紹介・略歴

1999年3月	東北大学大学院薬学研究科 博士課程前期 修了
1999年4月	Pfizer社 中央研究所 研究員 (2008年4月退職) Pfizer社 ミシガン研究所 Bioimaging Unit 出向 (2006年)
2008年2月	東京大学大学院農学研究科 獣医学博士号 取得
2008年5月	メルボルン大学医学部 Research Fellow Anatomy and Cell Biology Laboratory, Prof. J.B. Furness
2010年5月	鳥居薬品 (株) 入社 研究所 舌下免疫療法開発 非臨床担当
2016年4月	同社 研究所 副所長 薬理・免疫チームリーダー
2019年10月	同社 メディカル アフェアーズ部 副部長 (現職)

I型アレルギーに対する SLIT 錠の開発に従事。現在は、AITの作用機序解析及び新規 JAK 阻害外用剤の育薬に取り組んでいる。国内唯一のアレルゲンメーカーの一員として、多くの共同研究に参画している。



マスト細胞活性化制御から考えるアレルギー創薬

山梨大学医学部免疫学講座 中尾 篤人

花粉症や喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどのアレルギー疾患の病態において、マスト細胞は主たる役割をする細胞の1つです。従って、マスト細胞の活性化を制御することはアレルギー疾患の創薬に直結可能と考えられます。私たちは、近年、概日時計の制御、新規のポリフェノールの添加、脳内報酬系の活性化といった従来のアレルギー疾患治療ではあまり認識されていなかった方法によってマスト細胞活性化をコントロールし、アレルギー反応を抑制できることを示してきました。本シンポジウムでは、それらの知見を紹介するとともに、これまでのアレルギー疾患治療の歴史を踏まえて、マスト細胞を直接標的とするアレルギー創薬の将来の可能性について皆様と議論したいと思います。

略歴：

- 平成元年 千葉大学医学部卒業
- 同年 千葉大学内科研修医（第二内科入局）
- 平成 3年 国保旭中央病院内科医員
- 平成 7年 スウェーデンウプサラ大学ロードウィック癌研究所研究員
- 平成 13年 順天堂大学医学部アトピー疾患研究センター講師
- 平成 15年 山梨大学医学部免疫学講座教授・順天堂大学医学部客員教授
- 平成 25年 山梨大学医学科長
- 平成 29年 山梨大学医学部長
- 令和 3年 山梨大学学長補佐